

近江国内を通過した琉球使節に関する史料について

青柳 周一

はじめに

滋賀大学経済学部附属史料館では、平成二八年度春季展示を「琉球貿易図屏風と琉球使節の「江戸上り」というテーマで開催した^{〔1〕}。その内容や実施状況の詳細は本号の「彙報」欄を参照されたい。筆者はこの展示の準備を通じて、史料館の収蔵史料の中に近世の琉球使節に関する記録が数多く含まれていることを改めて確認できた。

ここで、琉球使節について簡単に説明しておこう。近世の琉球では、江戸幕府の將軍の代替わり時には「慶賀使」を、琉球国王の代替わり時には「謝恩使」を、それぞれ江戸へ向けて派遣していた。寛永十一年（一六三四）、上洛していた徳川家光に佐敷王子・金武王子が二条城で拝謁したのが琉球使節のはじまりとされ、嘉永三年（一八五〇）までに計一八回にわたり派遣された。なお、明治五年（一七八二）には維新を慶賀する名目の使節が東京へ派遣されており、これが最後の琉球使節となった。

毎回の使節の人数は約一〇〇人（慶賀と謝恩が重なった時には一七〇人ほど）であったが、むしろ警護として同行した薩摩藩側の人数の方が多く、宝永七年（一七一〇）には四一四七人にもなった。琉球使節はまず琉球から鹿児島へ向かい、九州の西海岸から下関を経て瀬戸内海を

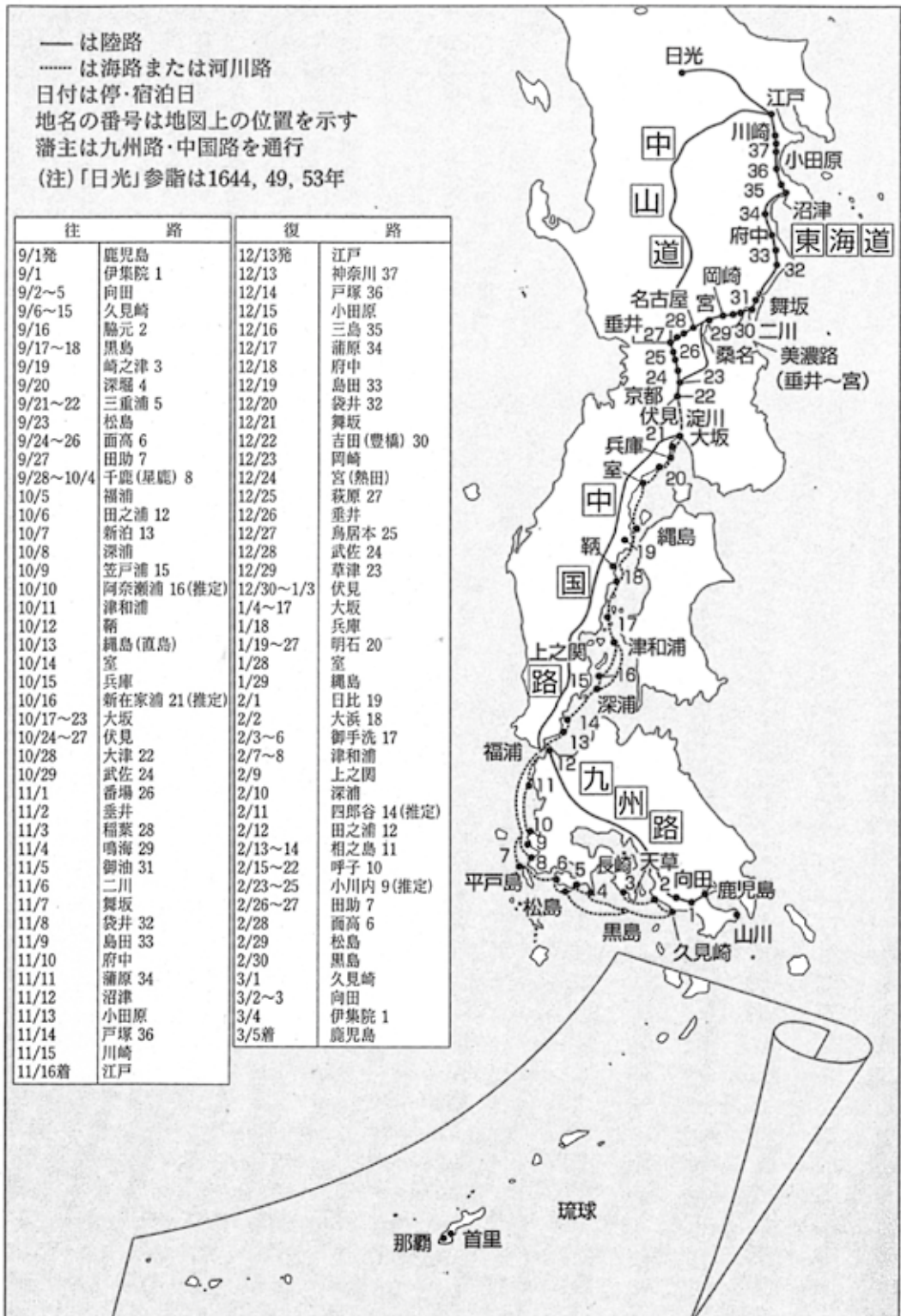
東へ進み、大坂に着くと淀川を遡って京都に至る。正徳四年（一七一四）以降は、京都から東海道を進んで近江国草津宿より中山道に入り、近江国内を通過した後、美濃路から再度東海道へ出て江戸に向かうというコースが取られた（次項図参照）。

当史料館が滋賀県内各地から寄贈・寄託いただいている史料群には、彦根市鳥居本や米原市醒井・柏原など、かつて中山道の宿駅が置かれた地域や、中山道に近接する地域に伝来したものも多い。それらの中に、中山道を用いて近江国内を通行した琉球使節に関する記録が含まれているのである。これら史料は、近年刊行された『新修彦根市史第二巻 通史編 近世』（彦根市史編集委員会、二〇〇八）や『米原町史 通史編』（米原町史編さん委員会、二〇〇二）など、県内の自治体史で活用されているが、県外ことに沖縄県現地ではあまり知られていないと考える。

本稿では先述の春季展示で用いたものを中心に、琉球使節による近江国内通行に関する史料館収蔵史料を紹介するものである。近世の日琉関係史研究の進展について、裨益するところがあれば幸いである。

一 近江商人・中井源左衛門家文書中の琉球使節関係史料

琉球使節が日本を訪れた際には、さまざまな「琉球物刊本」が刊行されるなどといった「琉球ブーム」が巻き起こり、街道沿いを中心に多くの情報飛び交った。これと関連して、蒲生郡日野を本拠とする近江商人の中井源左衛門家の文書中にも、天保三年（一八三二）に派遣された琉球使節一行の名前を記した史料が残されている。この使節は、尚育王（第二尚氏一八代、在位一八三五―四七）が新たな琉球国王となったことから江戸へ派遣された謝恩使である。



天保三年(1832)琉球使節の鹿兒島上陸後の行程(紙屋敦之『大君外交と東アジア』吉川弘文館,1997年)

使節一行の人数は七八人で、正使は豊見城王子朝典（鹿兒島で死去しており、普天間親雲上が代役となっている）、副司は沢岬親方安度であった。後者について、史料中では「澤岬」と誤記している。また「親方」や「親雲上」「里之子」は、琉球士族の位階である。「親雲上」は「ペーくみー」または「ペーちん」と読むが、史料中では「ハイキン」と読み仮名を振っている。「里之子（さとぬし）」についても、「呈之子」と誤記している。

【史料1】⁽³⁾

天保三辰冬来朝

琉球人名前

正使

トヨミックス
豊見城王子

上下拾五人

副使

サハキヨヤカタ
澤砥親方

上下七人

讃儀官

フデマハイキ
普天間親雲上

上下四人

楽子

イシャトウ
伊舍堂親雲上

上下三人

議衛正

イノマ
議間親雲上

同

掌翰使

ヨナハ
與那覇親雲上

同

同

タマクス
玉城親雲上

同

正使讃

フクヤ
譜久山親雲上

同

マヘイヒラ
真栄平親雲上

同

副使々讃并

ヨコタ
與古田親雲上

書役兼務

副使々讃

コハク
小波蔵親雲上

同

楽師

トミヤマ
富山親雲上 上下弐人

イルクスク
池城親雲上 同

ウチマ
内間親雲上 同

クシカハ
具志川親雲上 同

ヒラ
平良親雲上 同

フクムラ
譜久村■之子

上下三人

ハツモト
浜元呈之子

同

楽童子

ウチハラ
宇池原呈之子

同

ノボリカ
登川呈之子

同

トミナカ
富永呈之子

同

近江国内を通過した琉球使節に関する史料について

小録呈之子

同

別路次楽人老

メ九拾九人

二 高宮宿での火事発生とその事後処理

文化三年（一八〇六）に江戸へ派遣された謝恩使一行（尚瀬王（第二尚氏一七代、在位一八〇四～三四）の即位についてのもの）が、翌四年一月六日にその復路で中山道高宮宿に宿泊した夜、火事が発生した。現場は、同宿の「北之端西之浦手（裏手）」にあった彦次郎という者の小屋である。この一件は、すでに『新修彦根市史第二巻通史編近世』で紹介されている。

彦次郎は「茶屋旅籠屋渡世」であったが、当日は琉球人ではなく「琉球人御雇方拾人計」が泊まっていただけであり、出火した小屋の中にも使節が持参した道具類などはなかった。また、その小屋は往還に面しておらず、こうした場所での火事を幕府の道中奉行へ届け出た先例はないのだが、高宮宿では琉球使節が宿泊中の出来事であったことを重視して、道中奉行への届書の案文も作成しながら彦根藩に指示を仰いでいる。

しかし彦根藩は、道中奉行への届け出を命じなかった。これについて『新修彦根市史』では、同じく外国からの使節である朝鮮通信使と比べて簡略な対応であり、琉球使節は一段低く扱われていたことと関わりと論じている。

ここでは高宮宿の脇本陣・問屋であった塩谷家文書中に残る本件の留

帳について、その翻刻文を掲載する。

【史料2⁴】

（表紙）「

高宮宿

文化四年卯正月六日、琉球人御帰国御泊之夜、北之宿端彦

次郎小屋老軒焼失致候二付御届書并御尋之御返答書

尤江戸表へ御届ニハ不及候得共諸事留置

乍恐以書付御注進奉申上候

一 小屋老軒

彦次郎

右之小屋、今晚九ツ時前、当宿北之端西之浦手、彦次郎と申者之明小屋分出火仕、早速走集り潰申候而、類焼無御座、勿論人馬過等も無御座候、此段乍恐以書付御注進奉申上候、以上

文化四年卯正月六日夜

高宮村

庄屋

横目

御奉行様

御尋二付乍恐以書付奉申上候

一昨六日夜子之下刻、当宿北之宿鼻彦次郎と申者之裏二御座候小屋、燃上り候二付、早速走集り、即刻潰消申候、則別紙絵図面之通二御座候、猶又是迄異国人通行并上宿等之節、出火之儀無之哉、御尋被仰出、吟味仕候得共、右様之儀是迄一切無御座候、且又往還通分裏二御座候小屋等焼失仕候節者、道中御奉行様江御届ケ申上候例者、是迄無御座候得共、琉球人止宿之儀二候得者、御届ケ可申上候哉奉伺上候、右御尋二付奉申上候、并乍恐御伺奉申上候、已上

文化四年

卯正月七日

高宮宿

庄屋 次兵衛

同 市兵衛

同

小林太左衛門

同 与三右衛門

横目 甚五郎

御奉行様

御尋二付乍恐以書付奉申上候

一昨夜焼失仕候彦次郎小屋之儀、当時二而ハ明キ小屋二而、何も入置不申、尤彦次郎儀者茶屋旅籠屋渡世仕罷有候而、琉球人御雇方拾人計之宿仕罷有候得共、御泊之御荷物等も入不申、何合起り候火共難相分奉存候、右御尋二付乍恐以書付奉申上候、以上

文化四年

卯正月七日

高宮宿

庄屋 四人

横目 壱人

御奉行様

乍恐以書付御伺奉申上候

一此度当宿彦次郎と申者、居宅之裏二御座候小屋、琉球人御止宿之夜、焼失仕候例者、往還筋二無御座候得ハ、道中御奉行様へ御届ケハ不仕候得共、琉球人御止宿夜之儀二付、別紙通御届ケ申上■奉存候、此段乍恐御伺奉申上候、以上

文化四年

卯正月七日

高宮宿

庄屋 四人

横目 壱人

御奉行様

道中御奉行様奉差上候書付之下書

乍恐以宿繼御注進奉申上候

一今月六日夜子之下一刻、当宿江戸之方宿端彦次郎と申者居宅之裏二御座候、小屋壱軒焼失仕、早速走集り、即刻潰消申候二付、別紙絵図相認メ奉差上候、尤類焼も無御座、人馬怪我等無御座候、荷物坏紛失無御座候、勿論往来筋二無御座候節ハ、是迄御届ケも不奉申上候得共、琉球人御止宿之夜之儀二付、乍恐以宿繼御注進奉申上候、以上

文化四年

卯正月七日

中仙道高宮宿

問屋 次右衛門

年寄 次兵衛

道中両

御奉行様

御用人中様

御尋二付乍恐以書付奉申上候

一宿方村方差別有之哉之儀、御尋被仰出奉畏候、宿方と申而、往来通二限候儀二者無御座候、一村中宿村之差別、聊茂無御座候、既二楽宮様御下向之節、裏家二而も御用二相立可申家之分ハ宿として書上ケ置申候、尚又御分間御用之節ハ、往来通り計御書取被遊

候、併裏家二有之寺院等、并家数人別等ハ御尋ニ付、一村中不残書上ケ置申候、猶又宿役之義、一村中相勤、村役之義勿論一村中相勤申候、仍而宿用之節者、一村中宿と相唱、村用之節者勿論、村と相唱申候、御尋ニ付、乍恐以書付奉申上候、已上

文化四年

高宮宿

卯正月八日

庄屋 四人

横目 式人

御奉行様

以書付相達し候、然ハ此間其村方出火ニ付、道中御奉行所江届之儀被相伺候処、最早不及其儀候段可相達旨、御奉行所被仰出候、依之相達候、以上

正月十日

筋方 元ノ所

高宮宿 役人中

右之通御届ケ并御伺御尋ニ付、御返答書差上申候所、右以御差紙を道中御奉行様へ御届ニハ及不申候段、被仰出候
又々御代官所様ハ三ヶ宿へ御尋被仰出候ニ付、左之通御返答書差上候

御尋ニ付乍恐以書付奉申上候

一当宿出火之節、道中御奉行様江御届ケ之儀、御尋被仰出奉畏候、往還通焼失仕候節ハ、御届ケ奉申上候、裏家焼失仕候節ハ、是迄御届ケ不奉申上候、則享和三亥六月廿二日夜四ツ時字西浦小路と申処、権助と申者火本仕、竈数五軒焼失仕候、文化二丑五月三日四ツ時、茂右衛門と申者之小屋焼失仕候、右両度者御届ケハ不奉

申上候、依之乍恐以書付御返答奉申上候、以上

文化四年

高宮宿

卯正月十三日

庄屋 四人

横目 壹人

御代官所様

(以下、藩からの同様の質問に対する鳥居本宿と番場宿からの回答の文面。双方共にそうした場合は届けないが、類焼の程度により藩の指示を仰ぐとする。 中略)

彦次郎儀、其夜御叱之上、戸ノ被仰付、七日之間為相慎置、十四日ニ御免被仰付候

三 鳥居本宿での宿泊と使節の諸道具

鳥居本宿の本陣であった寺村家に伝来した文書中にも、琉球使節の休泊（鳥居本宿では往路での休憩と、復路での宿泊が恒例）や、その応対に関する史料が残されている。同宿が琉球使節を迎えた際の状況については前出の『新修彦根市史 第二卷』に詳しいが、ここでは寛延二年（一七四九）から嘉永三年（一八五〇）にかけて八冊残っている「宿割帳」という表題の史料を取り上げる。

これは、鳥居本宿での琉球使節および同行の薩摩藩士の宿泊場所を定める際に作成された史料であるが、とくに天保三年（一八三二）のものには「牌板」「龍刀」「涼傘」といった琉球使節が行列の際に用いた諸道具類や、乗り物（轎）などの名称も詳しく記されており、注目される。

なお、これら道具類は、「天保三年来朝琉球人行列記」（薩州御出入方取次判元伏見箱屋町丹波屋新左衛門、同下板橋兼春市之丞、寺町通錦小

路上ル京都書林菱屋弥兵衛）や「天保壬辰新録中山聘使略」（永斎蔵板）などといった、この年の琉球使節を描いた絵図中に書き込まれた名称とも合致する⁽⁶⁾。

以下、使節の正使であった豊見城王子ら一行による寺村家への宿泊に関する箇所を翻刻する。「荷物割宿」とされている「市郎兵衛」は、鳥居本宿で赤玉神教丸の製造・販売を行った有川市郎兵衛であろう。

【史料3】

（表紙）「天保三辰年十二月廿七日

琉球人帰国之節泊御宿割帳

御附添 嶋津但馬様

鳥居本宿

御本陣 寺村周助」

幕宿

琉球人三拾八人

豊見城王子

現上下十五人

重久金治郎様

樺山十郎太様

平田十郎太様

御本陣

荷物割宿

市郎兵衛

手伝忝人

人足五人

牌板式ッ

龍刀忝振

轎忝挺

乗物忝挺

鍵式本

御返翰櫃一竿

涼傘一本

長柄八本

唐櫃三ッ

衣家八荷

茶弁当式荷

挑燈籠一荷

合羽籠八荷

台輪駕籠八挺

差笠三本

日笠式本

皮籠式十九

衣家入櫃忝ッ

指入弁当忝荷

水風呂忝ッ

挟箱忝対

龍刀并唐櫃入家一ッ

椀箱忝荷

鍋入箱忝荷

長持八棹

砂糖入箱式ッ

万入中壺六本

大重入箱式荷

菜櫃式荷

日帳簾筒忝ッ

藥箱式ッ

万入箱式ッ

清分箱式ッ

跡付式十九

柳箇履三ッ

沓籠式十五荷

万袋式十五

呉座袋式十九

帳箱四ッ

掛硯忝ッ

竹皮籠式ッ

座樂器櫃式竿

御付添之分

手鍵三本

両掛挟箱三荷

台輪駕籠三挺

幕宿

琉球人式拾忝人

沢^(マ)砥親方

近江国内を通過した琉球使節に関する史料について

現上下九人

八木長右衛門様

手伝壺人

扇や吉郎兵衛

人足五人

(後略)

四 醒井宿の「琉球人御触留帳」と柏原宿の「万留帳」

琉球使節の通行に際して、同行する薩摩藩士や幕府の道中奉行は多くの触を流し、宿駅や沿道の村々へ指示を伝えていた。中山道の醒井宿ではそうした触を記録した簿冊（触留）を編集し、保存している。これと同様の触留は、朝鮮通信使の通行に関する触についても作成された。

現在、史料館で収蔵している醒井共有文書中に見られる琉球使節関連の触留は、下記の通りである（表題および分類・番号は『醒井文書目録』（滋賀大学経済学部史料館）による）。

・文化三年（一八〇六）八月「琉球人御触留帳」（中山道醒井宿問屋中↓、交通三八）

・天保十三年（一八四二）一二月「琉球人帰国御触書留帳」（醒井宿庄屋・問屋・年寄↓、交通四三）

・年末詳「〔琉球人方先触〕」（表紙・裏表紙欠カ、交通五八）

このうち「〔琉球人方先触〕」については、同史料に収められている「寅七月九日」に発せられた先触の文面中に、「薩摩宰相殿、今般琉球人被召連就参勤、八月廿二日国許発駕、同日出立」という一文がある。これについて、天保十三年（寅年、一八四二）の琉球使節が鹿児島を八月二二日に出発しているのと日付が合致するので、「〔琉球人方先触〕」は

この使節に関する触を収めたものと見ておきたい。

いっぽう柏原宿では、毎年発せられるさまざまな触や、自分たちから代官や諸役所へ提出した文書の控えなどを記録した「万留帳」という表題の帳簿を作成・保管していた。琉球使節が当地を通過した年の「万留帳」には、その使節についての触や、通行時の人馬賃など費用の負担に関する願書の文面などが収められている。

ここでは、まず宝暦十三〜明和三年（一七六三〜六）分の「万留帳」から、徳川家治が將軍となったことについて派遣された明和元年（一七六四）の慶賀使について、その翌年に近江国内の宿駅が供出した人馬賃金を先例通りに「近江一国役高割」にすることを通達した触を紹介する。差出の「播磨」は京都西町奉行の太田播磨守正清、「阿波」は「安房」の誤記で、同じく京都東町奉行の小林安房守春郷である。

【史料4】

（明治二年）

西ノ正月廿九日戌刻

大野木村分請取

今度琉球人往来之節、道中筋継立人馬之儀ニ付、先格之通江州宿々分者、近江一国役高割ニ相成候間、御領・私領・寺社領村高・地頭附高、別紙案文之通、帳面ニ委細書付、庄屋・年寄印形致シ、一郡切村々不拔様、念入認メ、順々無遅滞相廻シ、触留村々右帳面、京都奉行所江可致持参者也

西ノ正月 在府ニ付無印形

播磨

阿波 印

江州坂田郡村々

また寛政六・九年（一七九四・七）分の「万留帳」⁸には、同八年の尚温王（第二尚氏一五代、在位一七九五～一八〇二）の謝恩使の通行について、柏原・醒井両宿が連名で大和郡山藩へ提出した願書の文面が記されている。これによれば、琉球使節の通行に関わる宿駅の負担は「明和年中」には「御国割銀」によって賄われたとあり、史料4の内容とも合致する。しかし、その次の「戌年（寛政二年）」の琉球使節については、負担方法を「新格宿助郷勤」とする変更がなされた。寛政二年の琉球使節とは、徳川家斉が將軍となったことに対する尚穆王（第二尚氏一四代、在位一七五二～一七九四）による慶賀使である。

寛政八年の琉球使節についてもこの方法が踏襲されたので、両宿は琉球使節の通行によってどれほどの負担を強いられたかを大和郡山藩の代官所に説明しながら、「銀式貫目宛」を拝借することを願っている。

【史料5】

乍恐以書付奉願上候

一 此度琉球人参府、帰国人馬勤方之儀、去ル戌年格合を以人馬致手当、御用向無滞相勤可申段、道中

御奉行様へ被、仰触有之、其後御老中様御証文を以被 仰付、奉畏御請書奉差上候、右人馬繼立之儀者、往古 御治世以来数度之琉球人、人馬賃金者通行之節、御国割二而、宿方為助成宿場請負勤二被 仰付、聊之御国割銀、村方江相懸り、宿方格別之助成二被 成下候吉例二御座候処、猶更明和年中琉球人之節茂、先例之

近江国内を通過した琉球使節に関する史料について

通、御国割二而、宿助郷ハ就中御国割銀茂御免除被 成下置、別而難有奉存候処、去ル戌年者宿々役人共江戸表江被 召出、新格宿助郷勤二被 仰付候へ共、初而之御儀、差掛り候御用故、奉恐御下知御訴訟も不申上、帰村仕候

一 琉球人往返之儀者、異国格別御太切之御通行、右人馬往返凡三千人余、馬五百疋余、当日御高覧之通、大騒之次第第二御座候而、大坂着船日経難計、前廉分手賦仕、御通行相済候迄者宿方役人共昼夜油断不仕、打懸り罷有、下二而雇立申候事ハ諸失却不輕、或者持合等二茂仕、種々相働キ、休泊所江出張繼立申候事故、付添支配人多人数[■]出、品々入用相懸り、猶又村方二而茂諸向賄入用宿参会聞立見立、諸飛脚等失墜余程之儀二御さ候、乍併両宿共万々無滞相勤、恐悦之仕合二奉存候、然ル処、右奉申上候通、夥敷諸入用相懸り、難涉至極二奉存候処、一昨卯年十一月上納三郡村々、三拾六貫目と御割合、御用銀尚又当三月御借戻し被 仰付、其上琉球人御泊りを引請ケ、人馬雇立金、宿方諸入用混雜仕罷有候間、両宿之儀者何卒御免被 成下候様、段々御願奉申上候得共御領分村々一統之儀二付、重々御利害被 仰渡、相働キ候様被

仰渡候間、無是悲他借仕奉差上候、宿助郷困窮之時節とは乍申、助郷者手広キ儀二御さ候へ共、宿方ハ一村限二長日不退之御用相勤、異国人御国割御用迄茂重役二相勤候事、眼前難涉仕候段、御賢察被 成下置候分外無御座候、尤外御領主様二は御手当御さ候趣承り伝候、随而常々当宿之儀、御引立無御座候而者、年々黙然と衰弊仕候、何分御時節柄、多恐奉存候へ共、為御救壹ケ宿江御銀式貫目宛被 下置候様奉願上候、願之通被為 仰付被 下置候

ハ、両宿一統難有仕合ニ奉存候、以上

柏原宿

寛政九丁巳年三月

庄屋兩人 印

問屋兩人 印

年寄兩人 印

醒井宿

庄屋 印

問屋 印

年寄 印

御代官様

むすびにかえて

本稿では近江国内を通行した琉球使節について、関連する史料館収蔵史料を紹介した。今回取りあげた史料以外にも、たとえば愛知川で琉球使節の川渡しを行った際の、地元での人足の供出や、その賃銭の勘定などに関するものなどもある。

なお史料館では、琉球使節と同様の理由で、朝鮮通信使の中山道通行に関する史料も数多く見られる。こうした史料は日朝関係史研究に役立つであろう。史料館としては、収蔵史料の調査・研究成果を地元の滋賀県へ還元することを中心としつつ、それ以外の諸地域へも情報を発信し、収蔵史料が広く活用されることにつながる取り組みを続けていきたい。

注

(1) 春季展示の準備および本稿の執筆にあたっては、以下の文献を参照した。

- (1) 宮城栄昌『琉球使者の江戸上り』(第一書房、一九八二)、横山學『琉球国使節渡来の研究』(吉川弘文館、一九八七)、州立ハワイ大学・宝玲叢刊編集委員会等監修『江戸期琉球物資料集覧』一〜四(本邦書籍、一九八一)、紙屋敦之『大君外交と東アジア』(吉川弘文館、一九九七)、『沖縄県史ビジュアル版8 近世② 江戸上り』琉球使節の江戸参府(『沖縄県教育委員会、二〇〇一)、『平成二一年度博物館特別展 薩摩の琉球侵攻四〇〇年 琉球使節、江戸へ行く!』琉球慶賀使・謝恩使一行二〇〇〇キロの旅絵巻(『沖縄県立博物館・美術館、二〇〇九)、『開館一〇周年記念 琉球使節展』(豊橋市二川宿本陣資料館、二〇〇一)、『新修彦根市史 第二巻 通史編 近世』(彦根市史編集委員会、二〇〇八)、『米原町史 通史編』(米原町史編さん委員会、二〇〇二) など。なお「江戸上り」という語については、日本と琉球の間での従属的な上下関係を含意するものであり、むしろ当時の琉球国内で公的に使用された「江戸立(えどだち)」を用いるべきとの提言もなされている。
- 真栄平房昭『明清交替と対幕外交』(安里進他編『県史四七 沖縄県の歴史』(山川出版社、二〇〇四)、豊見山和行『江戸上り』から「江戸立」へー琉球使節像の転回ー(前出『琉球使節、江戸へ行く!』)など参照。
- (2) 以下、前掲注(1)『琉球国使節渡来の研究』、『江戸期琉球物資料集覧』など参照。
- (3) 中井源左衛門家文書六八六六「天保三辰冬来朝琉球人名前」。
- (4) 塩谷家文書・凶災八一。この史料は同様の留帳(八一二)と、出火場所を图示した高宮宿絵図二点(八一三、四)と共に、「文化四年卯正月六日琉球人御帰国御泊之夜北宿端彦次郎小屋出火致候二付御届書并御尋之御返答書・絵図諸事之留」などと墨書された紙袋に同封された状態で保管されている。
- (5) 寺村家文書二二(宿駅一七五)。
- (6) 前掲注(1)『江戸期琉球物資料集覧』第二巻参照。
- (7) 柏原共有文書・村政一五。
- (8) 同村政二七。なお、寛政八年の次に文化三年(一八〇六)の謝恩使が来訪した際にも、同じ方法による負担となったことから、同四年にも援助を求め願書を提出しており、その文面が文化三〜五年の「万留帳」(同村政三三)

に収められている。この史料については、出典の明記がないが『山東町史本編』（山東町史編さん委員会、一九九一）に同文のものが翻刻・掲載されている。この時柏原宿・醒井宿に下された手当金とその利殖については、『米原町史 通史編』第四章四節参照。

- (9) 小幡共有文書の天保五年「琉球人上下御通行ニ付川場人足其外川場失脚人足御尋ニ付奉申上候下書」（交通二）など。